



Title	無人駅舎が転用された「駅の宿ひらふ」の公共的意義に関する考察：複合化・用途転用された無人駅の公共性に関する研究
Author(s)	山下, 和佳奈; 森, 傑
Citation	学術講演梗概集. E-1, 建築計画I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎, 2011, 57-60
Issue Date	2011-07-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54898
Rights	日本建築学会. 本文データは学協会の許諾に基づきCiNiiから複製したものである.
Type	journal article
File Information	AIJ.E-1(2011).57-60.pdf



無人駅舎が転用された「駅の宿ひらふ」の公共的意義に関する考察 — 複合化・用途転用された無人駅の公共性に関する研究 —

正会員 ○山下 和佳奈*
同 森 傑**

無人駅 用途転用 民宿
比羅夫 公共性 ソーシャル・キャピタル

1. 目的と背景

鉄道はいわゆる公共交通機関として、公営・民営の別にかかわらず公共サービスとして一般的に認識されている。しかし、過疎化が進む地方では鉄道の利用者が減少しており、施設維持費や人件費の削減を理由に駅の無人化が進められている。そのような中、鉄道会社と自治体や住民との協議により、駅舎を図書館や交流センターなどと複合化したり、展示やレストランに利用していたりと、積極的に駅舎を利活用しようとする動きがある。このような駅舎は、公共交通機関としての機能は最小限としながらも、地域施設としては一定の役割を担っており、従来の駅舎とは異なる意味での公共性とその意義を生んでいると推察される。

そこで本研究は、日本で唯一無人駅舎を民宿へ転用した事例である「駅の宿ひらふ」に注目し、本来は不特定多数の利用者へのサービス提供を目的としていた公共施設としての鉄道駅が、宿泊者という特定の受益者のための民宿として施設的には利用されている中での駅の公共的意義を考察することを目的とする。

2. 研究方法

2-1. 研究対象の選定

文献調査¹⁾及びJR北海道へのヒアリング調査から道内の無人駅のうち複合化・用途転用された39駅を抽出した。付加された用途の運営主体に対し電話によるインタビュー調査を実施し、建物の所有、管理者、運営者、複合化・用途転用に至った経緯、利用者について実態を把握した。その結果、複合化・用途転用された無人駅を建物の活用形式から「複合」11駅、「駅舎なしホームのみ」14駅、「(一部)用途転用」14駅の3つに分類できた(表1)。複合・駅舎なしホームのみの場合、近隣住民の声などから地域の活性化や利便性の向上などを目的に、建物の一部もしくは全てを自治体が所有し活用しているものが多い。一方、(一部)用途転用の場合、JR所有の建物を個人が賃借し、施設活用しているものが多い。用途転用の理由として地域の荒廃の危惧が挙げられるが、用途転用することで具体的に起こる地域への影響や意義が定かでないものが多い。

その中でも、近隣住民にとって利用機会や理由がなく、地域への還元が最も少ないと予想される民宿に駅舎の一部を用途転用した比羅夫駅に注目した。

2-2. 現地調査概要

利用人数の少ない比羅夫駅において可能な限り駅利用者の属性・目的・行動を理解把握するために、2010年9月20日(月)～27日(月)まで「駅の宿ひらふ」に宿泊・滞在し、近隣住民・「駅の宿ひらふ」の宿泊者(以下、宿泊者)・その他駅訪問者(以下、駅訪問者)について、以下の調査を行った。調査エリアはホーム・待合室・駅前広場を含めた範囲とする。

(1) 行動観察調査

比羅夫駅における利用実態を把握するために、2010年9月22日(水)、25日(土)、26日(日)の3日間、列車の運行する6時～21時30分の時間帯に張り込み形式で行動観察調査を行った。その結果、近隣住民24、宿泊者134、駅訪問者235の延べ393の行動を観察できた。

(2) インタビュー調査

全ての駅利用者の中から協力が得られた人を対象にインタビュー調査を行った。近隣住民・駅訪問者については2010年9月21日(火)、23日(木)、24日(金)の3日間行い、近隣住民4人中3人、駅訪問者23人中5人の協力が得られた。宿泊者については20日(月)～26日(日)までの7日間行い、20人中18人の協力が得られた。

表1. 北海道内の複合化・用途転用された無人駅の分類

	複合	駅舎なしホームのみ	(一部)用途転用
公的機関による運営	白滝駅: 展示室 安国駅: 展示室 網走駅: 展示室 剣淵駅: 展示室 浜中駅: 展示室 熱帯駅: ホール 生田原駅: 図書館・文学館 雄野駅: 商工会・物産館 石狩太美駅: 町出張所 大森毛駅: 市支所 渡島当別駅: 郵便局	新冠駅: 交流センター 中富良野駅: 展示室 丸瀬布駅: 生涯学習館 女満別駅: 図書館 佐久駅: 伝承館 上ノ国駅: 商工会 納内駅: 市役所 浜小清水駅: 道の駅 浦臼駅: 歯科診療所	茶内駅: 展示コーナー 幾良駅: 展示スペース 豊橋駅: 図書コーナー 厚床駅: 交通ターミナル
民間・個人による運営		日高三石駅: 食堂 月ヶ岡駅: 直売所 由仁駅: 交流センター 目名駅: 交流センター 日高横別駅: レストラン(*)	比羅夫駅: 民宿 川湯温泉駅: 喫茶店 藻琴駅: 喫茶店 豊富駅: 喫茶店 沼ノ沢駅: レストラン 当麻駅: 売店 増路駅: 喫茶店 茶志内駅: 交流スペース 十勝駅: 図書コーナー 鹿部駅: 図書コーナー
所有	JR+自治体	自治体(※個人(株式会社))	JR

A Consideration of Public Meaning of EKI-NO-YADO HIRAFU

YAMASHITA Wakana and MORI Suguru

Converted from the Uninhabited Station:

A Study of Publicness of Complex Reused or Converted Uninhabited Stations

3. 調査地概要

3-1. 駅の宿ひらふ

比羅夫駅は北海道虻田郡倶知安町比羅夫（図1）にあり、日本で唯一無人駅で個人が民宿を経営している事例である。1982年に無人化されたが、駅舎の荒廃を危惧し有効活用すべきと考えたオーナー^{注1)}が国鉄（当時）側に直接掛け合い、1988年に駅舎の事務室を用途転用し民宿「駅の宿ひらふ」として開業した。待合室を除く駅舎と駅の土地の一部を一個人が借り受けた。民宿の1階（旧事務室）は談話室になっており、2階の和室と洋室の他駅舎の外にログコテージと丸太風呂を併設している。一日最大18人が宿泊でき、現在は年間約800人が宿泊している（図2）。

3-2. JR 比羅夫駅

JR 比羅夫駅からは旭川・小樽方面に一日9本（6:50、7:44、9:18、10:47、13:43、16:15、17:49、19:11、21:23）、函館・長万部方面に一日7本（6:35、8:00、9:36、13:59、16:46、18:13、21:00）ずつ列車が発着している。一日の乗車人数は平日は5人前後、土日祝日は10人前後と少なく、現在JR比羅夫駅を通勤利用しているのは樺山在住の夫婦一組のみである。

3-3. JR 比羅夫駅周辺

JR 比羅夫駅のある倶知安町比羅夫は面積約6,915,000㎡、人口204人（男103、女101;2010年10月現在）の地区であり、図3より東側に展開している。比羅夫駅は羊蹄山・ニセコアンヌプリなどの山に囲まれた盆地に立地しており、図3で図示した駅周辺の5軒以外の住民は高低差があり不便であるためあまり活用しないが、尻別川より西側に展開する樺山の住民の利用が見られる。

4. 駅利用者の行動分析

観察できた全ての行動を近隣住民・宿泊者・駅訪問者の属性毎に整理した。各々の行動を「交通サービスの利用」「その他の施設サービスの利用」「宿泊サービスの利用」「日常生活資源の利用」「観光資源の利用」の5つに分類し、調査エリアの平面図上にプロットした（図4）。

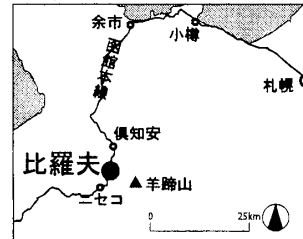


図1. 比羅夫駅の位置図



図2. 「駅の宿ひらふ」と列車

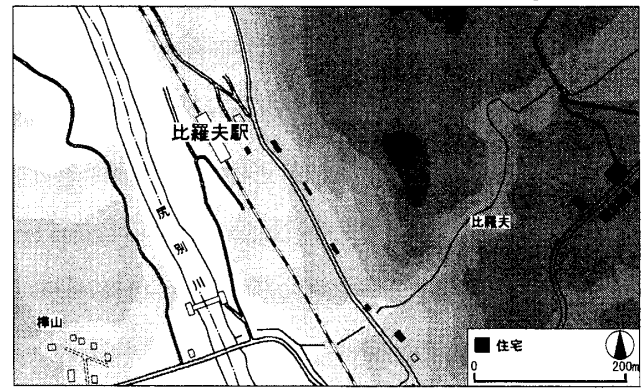


図3. 比羅夫駅周辺地図

表2. 行動の分類カテゴリーと具体例

カテゴリー	観察された行動の具体例
交通サービスの利用	列車の乗り降り、待合室やホームで列車を待つ
その他の施設サービスの利用	喫煙、自動車の乗り降り
宿泊サービスの利用	食事提供、宿泊客同士の雑談
日常生活資源の利用	景色・草花を眺める、散歩する
観光資源の利用	駅舎・列車の写真撮影、駅舎・列車を眺める

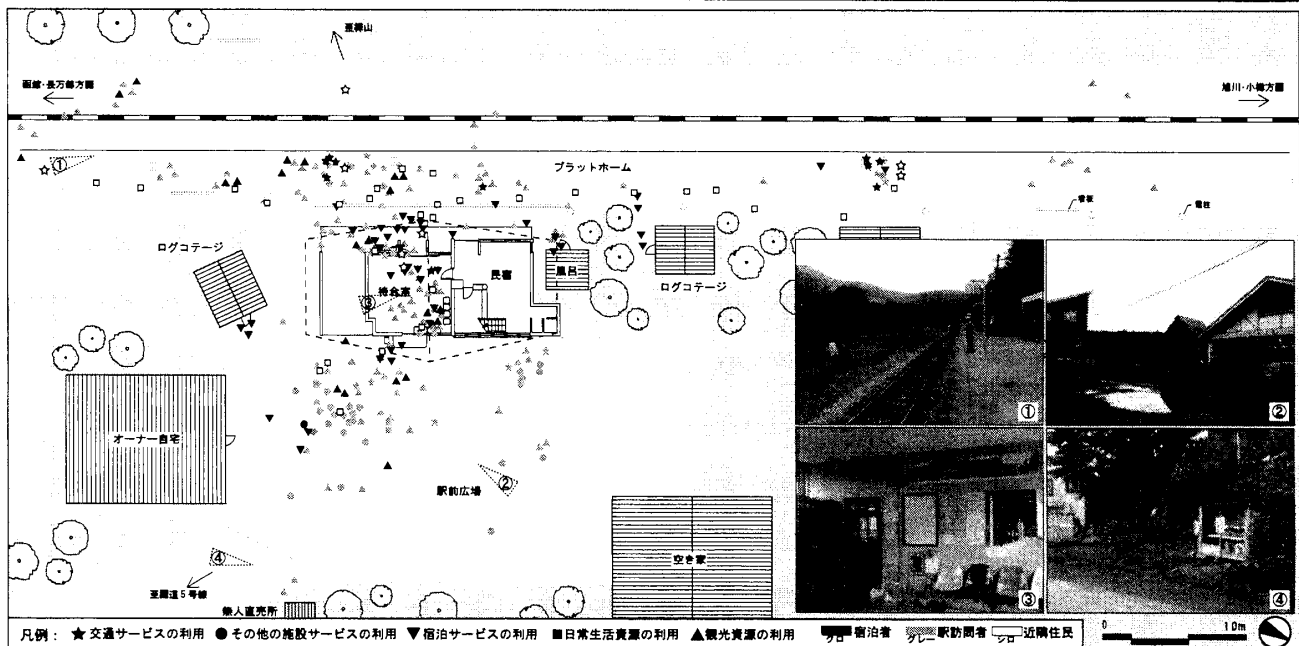


図4. 比羅夫駅の様子と属性別利用実態

4-1. 属性毎の行動

(1) 近隣住民

駅前広場では、近隣住民が駅訪問者と会話をする行動が観察できた。ホームでは、地面に咲く草花を眺める、ホーム沿いを散歩するなどの行動が観察できたことから、近隣住民はホーム全体を日常生活資源として捉え、余暇的活動の場として利用していることがわかる。

(2) 宿泊者

待合室では、宿泊者がオーナーや他の宿泊者と会話をする行動が観察できたことから、待合室が隣接する民宿の談話室の延長として利用されているといえる。ホームでは、宿泊者がバーベキューをする、ホームを通過し丸太風呂に向かって移動するなどの行動が観察できた。このことから、前者はホームが駅舎内に併設された宿泊施設の食堂として、後者は廊下として利用されていることがわかる。以上より、本来宿泊施設内で行われるサービスの利用が、待合室やホームと言った公共空間を介し、駅全体に展開されていることがわかる。

(3) 駅訪問者

駅前広場では、駅訪問者が近隣住民に道を尋ね世間話をする行動が観察できた。調査エリア全体では、駅舎・列車の撮影、駅舎を眺めるなどの行動が観察できたことから、比羅夫駅全体が観光資源として捉えられ利用されているといえる。

4-2. 異なる属性間の交流

次に、駅利用者同士の交流に着目すると、属性内だけでなく異なる属性間の交流が観察できた。その際、駅舎周辺での交流は観察できたが、ログコテージより北側では観察することができなかった(図5)。

(1) 宿泊者－駅訪問者

宿泊者がSLを見学に訪れた駅訪問者と意気投合し、待合室で連絡先を交換する場面が見られた(図5(1)－③)。これは、民宿の出入り口が駅待合室の中にのみあり、待合室を経由しなければホームに向かうことができないという空間的な特徴から実現したものと考えられる。

また、ホームでバーベキューをしていた宿泊者が列車に乗っている乗客と手を振りあう場面が観察された(図5(1)－②)。これは、「駅の宿ひらふ」の宿泊サービスがホームでバーベキューを行う給仕方法であり、列車との距離が近いことにより実現している。

これらから、宿泊サービスの利用が駅全体に展開することにより、ホームと待合室が宿泊客－駅訪問者の接点となり、交流が生まれるきっかけを与えているといえる。

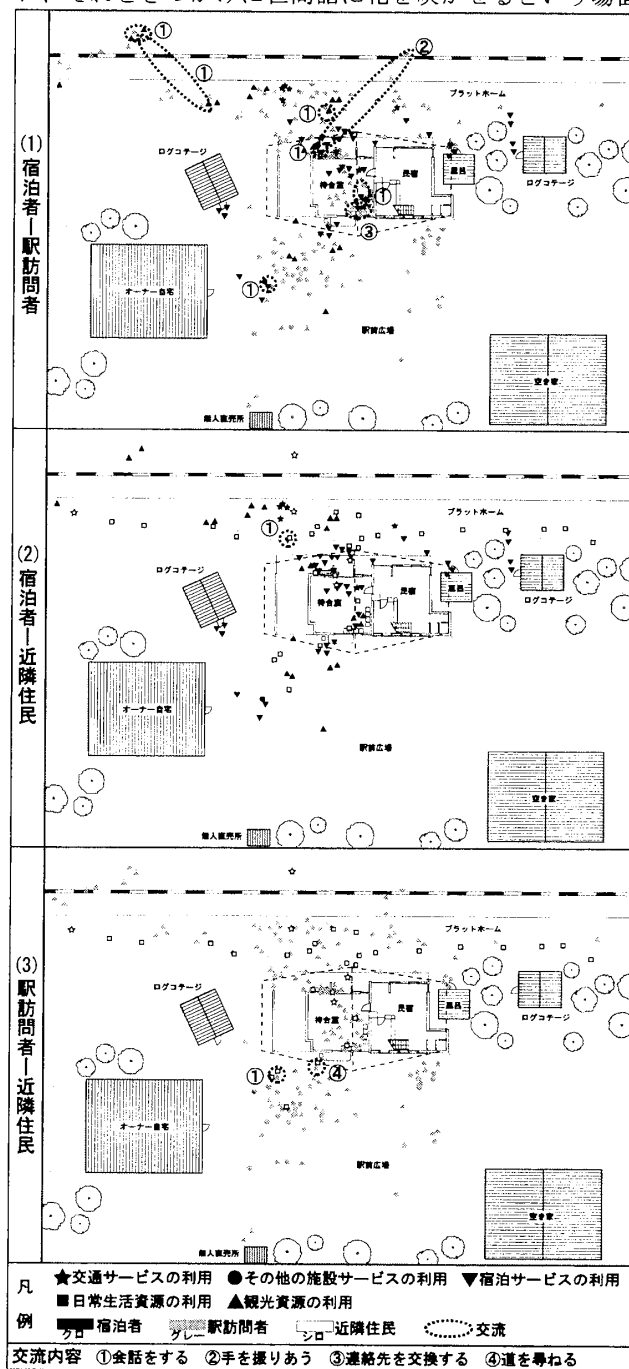
(2) 宿泊者－近隣住民

朝10:00頃、近隣住民が宿泊客に話しかけようとする姿が観察できたが、それ以外に交流は見られなかった(図5(2)－①)。宿泊客は、駅のホーム沿いにあるログコテージか民宿を利用する。ログコテージから民宿ま

ではホームと待合室を通過しなければならない。しかし、近隣住民が比羅夫駅に散歩をしに訪れるのは午前中もしくは昼間に集中しているのに対して、宿泊者が「駅の宿ひらふ」に滞在するのは夕方から翌朝10:00までである。しかしながら、朝10:00以前に散歩をしに来た近隣住民と、ログコテージに宿泊した宿泊者には接点生まれる。以上より、時間的制約はあるもののホームは宿泊客－近隣住民に接点を与えているといえる。

(3) 駅訪問者－近隣住民

車で訪れた駅訪問者が駅前広場で近隣住民に道を尋ね、それをきっかけに世間話に花を咲かせるという場面



が観察された(図5(3)-①)。これは、比羅夫駅の周辺には駐車できる場所が駅前広場しかなく、駅前広場が駐車スペースとして活用されていることと、近隣住民がホームに散歩に訪れる際に駅前広場を経由することから実現したものと考えられる。このように、駅前広場は駅訪問者・近隣住民に接点を与えていると言える。

この他にもホームでの散歩や、ホームから比羅夫駅の駅舎や列車などを撮影・観光することは、ホームと駅前広場までの間に仕切りなどが一切なく誰でも自由に行き来することにより可能になっている。したがって、ホームも駅訪問者・近隣住民に接点を与えているといえる。

5. 駅利用者の評価分析

駅利用者の比羅夫駅に対する認識を明らかにするために、インタビュー調査での、近隣住民・宿泊者・駅訪問者、各々の属性からみた比羅夫駅への評価に関する発言についてKJ法を応用し分類を作成した(表4)。

(1) **交流性**：近隣住民は、比羅夫駅への地域外の利用者との交流を目的として利用している。宿泊者は、宿泊者同士での交流を目的として利用しているが、近隣住民との交流は求めていることがわかる。両者とも比羅夫駅について交流を求めている点で共通するが、その対象は一致しない。しかし、両者の意識に相違はあるものの実際に挨拶などの交流が起こっている。以上より、比羅夫駅が両者の偶発的な交流の場となっており、両者とも交流性を評価している。

(2) **非日常性**：宿泊者は、都会の喧騒から離れ静かに過ごせるという非日常性空間を評価している。

(3) **希少性**：宿泊者・駅訪問者は、ホームに飲食スペースがある、滞在中列車を間近に見れるなど、古い駅舎を民宿に転用したことによる希少性を評価している。

(4) **景観性**：宿泊者・駅訪問者は、都会では見られない景色として景観性を評価している。

(5) **利便性**：宿泊者は、利用者の少ない無人駅にも関わ

らず宿泊できるという利便性を評価している。

(6) **閑散性**：近隣住民は、複合化以前の無人駅を寂しいと捉えていたが、現在駅利用者が増えていることを歓迎している。一方で、宿泊客・駅訪問者は、音がなく静かな所として閑散性を評価している。

(7) **再訪性**：宿泊客・駅訪問者は、比羅夫駅に再び訪れたり、他者に紹介したいと感じており、再訪性を評価している。

6. 考察とまとめ

「駅の宿ひらふ」は特定の受益者のために利用される施設であるが、調査エリアの各所で駅利用者の属性に関わらず交流が観察できた。異なる属性間の交流の場となっていることが、無人駅に「駅の宿ひらふ」が存在することの新たな公共的意義であるといえる。

分析より、以下のことが推察される。

- ・宿泊者・駅訪問者が比羅夫駅を利用する目的は、古い駅舎を民宿として転用したことによる希少性や、比羅夫駅周辺の環境がもたらす非日常性・景観性・利便性・閑散性による。

- ・近隣住民が比羅夫駅を利用する目的は、複合化以前に比べ頻繁に訪れる宿泊者・駅訪問者と出会える交流性による。

- ・宿泊者・駅訪問者が評価する再訪性があることで駅利用者の交流性の維持につながっている。

意図せずに交流が起こる契機として、以上のように駅舎に宿泊施設が付加されていることにより、無人駅となった後も駅利用者が存在するためと考えられる。

また、「駅の宿ひらふ」において宿泊サービスの利用が駅全体で展開される空間的特徴が交流を促していると推察される。

注1) JR から駅舎を賃借し、民宿を運営している人物

参考文献

1) 本久公洋、「北海道鉄道大図鑑」、北海道新聞社、2008

表4. 駅利用者の属性毎の比羅夫駅に対する認識

	近隣住民	宿泊者	駅訪問者
交流性	・自分の家の前まで宿泊客があるに来て、挨拶をしてくれる ・宿泊客場所を尋ねられ、その後しばらく手紙のやりとりをしていた ・バーベキューに参加して、若い人と話す機会が欲しい ・駅に人が常にいるのでうれしい・立ち寄り客で人が来る ・駅に散歩に行くときと会えるのがうれしい	・初めて会った人同士でお酒を飲んで、喋ったりして楽しい ・ここではない出会いがある ・電車から手を振ったりする光景が面白い ・誰かに気を使う旅は嫌なので、一人がいい ・誰かとの交流よりも、むしろ一人でぼーっとしているのが賢い	
非日常性		・日常を忘れられる ・俗世から離れた感じが好き ・セカンドハウスのような場所 ・時間がゆっくり流れている	
希少性		・ホームで一人でバーベキューをするのが恥ずかしかったが、今は気持ちよく感じる ・駅全体の雰囲気やノスタルジック ・ホームでお酒が飲めるのが最高 ・昔の駅舎をそのまま使っているのが魅力 ・鉄道オタクのための場所のようで鉄道オタクとしてははるかに面白い ・電車のすぐ横でバーベキューをしていて、びっくりした	・駅に宿があるのはおもしろいと思う ・テレビで見て来てみたかった ・昔懐かしい空間が味わえるのが賢い ・どうせ無人駅だろうと思っていたが、宿になっていて驚いた
景観性		・外を見ると緑ばかりで、普段見ない風景だからいい ・何も無い風景が都会にはない ・星が綺麗、空気がきれい ・こういう駅があれば街中の心配がないからいい	・都会ではまず味わえない田舎らしさ
利便性		・旅行好きにとってはとても便利な宿である ・音もなく静かだ ・なんにもない、音もない	
閑散性	・冬よりも人がいなくて、閑散としていた ・通勤・通学スキースキー利用して、とても賑わっていた ・今は人が増えてきている		・音がなくて、静かなところが何もない景色
再訪性		・月1で来たい ・次は娘も連れて来たい ・また来年も来る	・泊まってみたい

* 北海道大学大学院工学院 修士課程

** 北海道大学大学院工学研究院 教授・博(工)

* Graduate Student, Graduate school of Eng., Hokkaido Univ.

** Prof., Faculty of Eng., Hokkaido Univ., Ph.D.in Eng.